

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

大学生の持つ育児イメージと対児感情：
看護学科学生と他学科学生との比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): 育児イメージ, 対児感情, 大学生 キーワード (En): 作成者: 石松, 直子, 江藤, 節代, 山本, 捷子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000272

著作権は本学に帰属する。

大学生の持つ育児イメージと対児感情 －看護学科学生と他学科学生との比較－

University Students Images and Emotions Childcare
-Comparison of the nursing department students and other department
students-

石松直子・江藤節代・山本捷子

Naoko Ishimatu, Setuyo Eto, Shyoko Yamamoto,

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要約

大学生の育児に対する考え方を知るために、異なる3学科の学生を対象に育児イメージと対児感情の調査を行った。その結果、どの学科の学生も育児についてはアンビバレントなイメージを持っており、また、育児イメージと対児感情との間には有意な相関があることがわかった。特に保育学科学生は子ども好きで子どもの世話の経験があるため育児イメージも対児感情得点ともに高かった。看護学科学生は育児イメージも対児感情得点も低かった。看護学科学生の母子看護教育において、育児イメージ・対児感情を高めるためには、子どもとの接触体験やよい育児イメージを得られるような方法を工夫する必要性が示唆された。

Key Words : 育児イメージ、対児感情、大学生

Abstract

The aim of this study is to help Maternity and Pediatric Nursing education to understand students thinking about childcare.

We examined 288 students at three universities.

Student's image of childcare was ambivalent but students who like children and affirmative estimation to their parents had received better scores. The students who experience with childcare had a better score in emotions.

There was a high correlation between images and emotions regarding childcare.

Of the three university student groups, childcare department students received the highest scores, but nursing department students received the lowest scores.

I. 緒言

最近、妊娠後の結婚や育児不安、乳幼児虐待など、育児や母子関係に関する問題が増加している。そこで、最近の若者の育児に対する考え方を知りたいと考え、看護学科、保育科、栄養学科の大学生を対象に育児イメージと対児感情の調査を行った。

対児感情に関する花沢の研究では、年齢が高く育児経験があるほど接近感情が高く、回避感情は低いといわれている（花沢 1992 年）。また、看護学生の持つ子どもへの思い、子どもに対する感情に関する研究報告は 1980 年代から数多く見られている。（星ら 1980 年、草場ら 1989 年、中ら 1990 年、吉田ら 1993 年、梶山ら 1994 年など）。しかし、育児イメージ、すなわち「成長過程にある子どもを育てることや子どものケアに関する思いや考え」に関しては、育児観、保育観、子供観など多くの概念があり、明確に育児イメージを定義したもののや、対児感情との関連を調査した研究も見当たらなかった。

そこで、大学生の持つ育児イメージと対児感情を知ることにより、最近の若者の育児に対する考え方を知り、特に看護学生の育児に対する姿勢を他の学科との比較によって明らかにし、母子看護学の教育の一助とするために調査を行ったので報告する。

II. 用語の操作的定義

1. 育児イメージ：親として子どもを育てることに対する感情と考え
2. 対児感情：花沢の対児感情尺度に示される子どもに対する感情であり、「あたたかい」や「明るい」などの接近感情、「よわよわしい」「なれなれしい」などの回避感情を含む。

III. 研究方法

1. 調査対象：大学生 計 288 名

- ・ A 大学の看護学科学生（3 年次の母子看護学の学習前） 111 名
- ・ B 短大の保育学科学生（2 年次の保育に関する各論学習前） 120 名
- ・ C 大学の栄養学科学生（4 年次の育児学の学習前） 57 名

2. 調査方法

調査紙法：研究者が各大学で授業する際、開始時に質問紙を直接配布し、即時回収した。

3. 調査内容

- 1) 背景：同胞数、将来生み育てたい子どもの希望数、子どもの世話経験の有無、ペットの世話経験の有無、子どもが好きか否か、母親の育児の仕方への評価、父親の育児の仕方への評価など 7 項目
- 2) 育児イメージ：「育児に対してどのようなイメージを持っていますか」という設問に対する自由回答を求めた。

- 3) 対児感情：花沢の対児感情尺度(1992年)による接近感情14項目ならびに回避感情14項目

4. 分析方法 (HALWIN 1995 を使用)

- 1) 育児イメージ：自由記述された文章から単語を抽出し、「楽しい」「かわいい」「自分が成長する」などのプラスイメージ、および「ストレス」「大変」「面倒」「自分の時間がない」「ノイローゼになる」などをマイナスイメージに分類した。

また、記述の内容がプラスイメージのみを「とても良い」、プラスイメージが多いものを「良い方」、混在する場合を「どちらともいえない」、マイナスイメージが多いものを「良くない方」、マイナスイメージのみのものを「良くない」、理想論のみ記述しているものを「理想論」に分類した。

- 2) 対児感情：「あたたかい」「明るい」などの接近感情14項目、また「よわよわしい」「なれなれしい」などの回避感情14項目に各1点～4点を配し、56点満点とする接近得点・回避得点とした。さらに、回避感情得点／(接近感情得点+回避感情得点)×100で計算して「拮抗指数」とし、50点が拮抗なし、50点より高いほど回避感情が高いとした。

- 3) 対象者の背景、育児イメージ、対児感情を集計し、それぞれの関連をT検定・相関関係にて求めた。

- 4) 各学科学生間の差異については、一元配置分散分析を行った。

5. 倫理的配慮：調査目的・方法やリスクについて、ならびに回答は自由であることを説明し、同意を得た後に調査を行った。得たデータはコード化し、個人が特定されないように配慮した。データの保管は一人の研究者が行い、鍵のかかる場所に3年間保管の後、廃棄する予定である。

IV. 結果

回収率・回答率は100%であった。

1. 対象の背景 (表1)

本調査対象の学生の同胞数は平均2.51人であった。将来生み育てたいと希望する子どもの数は平均2.70人で、80%以上の学生が小さな子どもやペットの世話したことがあり、86.7%が子ども好きであった。自分の母親の育児のしかたに関して84.6%が肯定的評価であり、父親の育児に関しては68.8%が肯定的であった。

各学科学生別の背景に有意差のあるものとして、看護学科学生は希望する子ども数が多く、保育学科学生は子ども好きが多く、父親の育児への評価が良かった。

表1 対象の背景

項目（人・％）	看護学科学生	保育学科学生	栄養科学生	平均
同 胞 数	2.43	2.62	2.49	2.51
希望する子供数	3.27 *	2.38	2.44	2.70
子供の世話経験	83.8	87.5	82.5	84.6
ペットの世話経験	83.8	79.2	80.7	81.2
子供好き	81.0	98.4 *	80.7	86.7
母親への評価	82.9	85.1	86.0	84.6
父親への評価	64.9	74.8 *	66.6	68.8

* = 5 % 有意差

2. 育児イメージ

育児イメージは、表2に示すように、プラスイメージとマイナスイメージが記述されており、6段階に分類した結果「とても良い」9.1 %、「良い方」31.5 %、「どちらでもない」27.3 %、「良くない方」14.0 %、「良くない」11.5 %、「理想論」6.6 %であった。

学科別では「とても良い」「良い方」など、よい良いイメージをもっているのは保育学科学生に多く、次いで栄養学科学生、看護学科学生の順であった。保育学科学生は看護学科学生より、良いイメージが多い傾向にあった。

表2 育児イメージの記述内容

	プラスイメージ				マイナスイメージ			
	感情	数	考 え	数	感情	数	考 え	数
親	楽しい	67	自分の成長になる	24	大変	165	育児ノイローゼになる	21
	うれしい	15	やりがいがある	21	難しい	55	ストレスがたまる	12
	喜ばしい	11	愛情あふれた行為	12	不安	10	母親のみがしている	10
	幸せ	6	大切・大事なこと	12	疲れる	4	自分の時間・自由がない	9
	心が癒される	6	発見がある	8	不眠	4	責任が重い	7
			生きがいになる	7	怖い	3	虐待がある	5
子供			すごいこと	2	気を使う	3		
	かわいい	24	子供の成長がみられる	34	夜泣き	7	話せないで理解しにくい	13
	あたたか	8	笑顔がうれしい	8	泣く	5		
	ふわふわ	2	無垢な存在	2	煩わしい	2		
その他					繊細	2		
					弱い	2		
	夫婦や周りの人の協力があるってできること 育て方で人生や人格が決まる大切なこと 体力のいること					24		
						19		
他	忍耐力のいること					7		
						3		

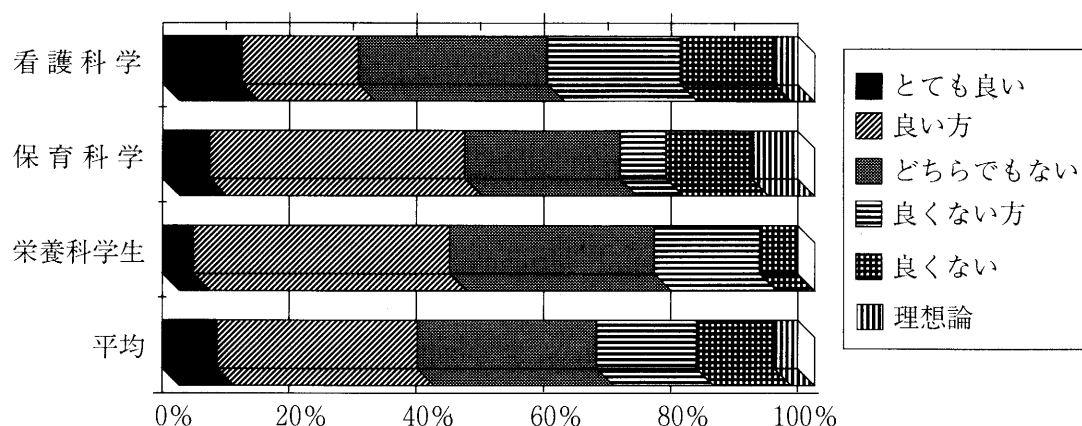


図1 学科別育児イメージ

3. 対児感情

対児感情の接近得点は平均 41.26 点、回避得点は 21.84 点、拮抗得点は 34.95 点であった。学科別には、接近得点は保育学科学生が高く、回避得点・拮抗得点は保育学科学生が低く、看護学科学生が有意に高かった。(表 3)

表 3 対児感情

	看護学科学生	保育学科学生	栄養学科学生	平均
接近感情得点	40.63	41.43 *	40.81	41.26
回避感情得点	22.46 *	21.26	22.35	21.84
拮抗得点	35.64 *	34.03	35.41	34.95

* = 5% 有意差

4. 学生の背景と育児イメージ・対児感情との関連

育児イメージと対児感情の関係を相関関係で分析した結果、表 4 に示すように育児イメージと対児感情には正の相関が見られ、育児イメージの良い学生ほど接近得点が高く、拮抗得点が低かった。

さらに、背景と育児イメージ・対児感情との関係を、育児イメージの良否、拮抗得点の平均値の上下、子ども好きか否か、母親への評価の良否、父親への評価の良否、同胞の有無に分けて T 検定した。その結果、表 5 に示すように、「父親への評価」、「母親への評価」、「子ども好き」が育児イメージと関係していた。

また対児感情では、「子ども好き」の学生は回避得点が低く、「子ども好き」で「子どもの世話経験」があり「母親への評価」のよい学生は、接近得点が高く、拮抗得点は低かった。

また「育児イメージが良い方」の学生は、「希望する子どもの数」が多い。さらに「子ども好き」で「母親への評価」がよい学生は接近得点が高く、回避得点・拮抗得点も低い。すなわち対児感情がよいと言える。

拮抗得点の高い学生は、「子どもの世話経験」があり「子ども好き」で、育児イメージが

良い。さらに「子ども好き」の学生は「希望する子ども数」が多く、「子どもの世話経験」をしたことがあり、「父親への評価」「母親への評価」がよかった。

「母親への評価」が肯定的な学生は「子ども好き」で「父親への評価」が良く、接近得点も高い。また「父親への評価」が肯定的な学生は「子ども好き」で、「母親への評価」も良かった。

表 4 背景と育児イメージ・対児感情の関係（相関係数）

		背 景						対 児 感 情			育児イ メージ
		希望子 供 数	子供世 話経験	ペット 経 験	子供好き	母親へ の評価	父親へ の評価	回避得点	接近得点	拮抗得点	
背 景	同 胞 数		-0.12510 *		-0.13723 *	-0.11824					
	希 望 子 供 数	-----	-0.15699 *		-0.19841 **						-0.12263
	子 供 世 話 経 験	-0.15699 *	-----		0.27561 ***	0.10661			-0.20650 ***	0.161177 *	0.12088
	ペ ッ ト 経 験			-----							0.11239
	景	子 供 好 き	-0.19841 **	0.27561 ***	-----		0.19161 **	0.15201 *	0.21926 ***	-0.32364 ***	0.39311 ***
	母 親 へ の 評 価		0.10661		0.19161 **	-----	0.56435 ***		-0.17366 **	0.11215	0.19108 **
	父 親 へ の 評 価				0.15201 *	0.56435 ***	-----		-0.10468		0.20962 ***
対 児 感 情	回 避 得 点				0.21926 ***			-----		0.76388 ***	0.17799 **
	接 近 得 点		-0.20650 ***		-0.32364 ***	-0.17366 **	-0.10486		-----	-0.57776 ***	-0.11451
	拮 抗 得 点		0.16177 *		0.39311 ***	0.11215		0.76388 ***	-0.57776 ***	-----	0.17771 **
育児イメージ		-0.12263	0.12088	0.11239	0.16168 *	0.19108 **	0.20962 ***	0.17799 **	-0.11451	0.17771 **	-----

信頼性係数 Cronbach 係数 接近項目 0.50227

回避項目 0.34480

表 5 背景と育児イメージ・対児感情の関係（T検定）

		対児感情	背 景			育 児 イメージ
		拮抗得点	子供好き	母親評価	父親評価	
背景	希望子供数	2.685 *	5.293 ***			2.440 *
	子供世話経験	2.491 *	4.999 ***	2.015 *	2.168 *	2.374 *
	子供好き	3.871 **		2.126 *	1.968 *	
	母親への評価		2.471 *		6.281 ***	3.136 **
	父親への評価		2.140 **	5.252 ***		
対児感情	回避得点	5.996 ***	2.140 *			6.513 ***
	接近得点	5.123 ***	2.762 **	2.406 *		
	拮抗得点		3.234 **	2.226 *	1.990 *	2.720 **
育児イメージ		2.603 *	2.494 *		2.578 *	

数値は t 値 * = 5 % ** = 1 % *** = 0.1 %

V. 考察

1. アンビバレントな育児イメージ

育児イメージに記述された内容から、多くの学生は、育児は「楽しい」や「子どもの成長がみられる」というプラスイメージを持っている反面、「育児は大変」や「育児ノイローゼになる」というマイナスイメージも持っており、育児にはアンビバレントなイメージを持っている。さらに「育て方で人生・人格が決まる」「体力／忍耐がいる」「夫婦や周りの協力がある」など育児を重荷に感じている意見も多く見られる。

2. 各学科学生間の育児イメージ・対児感情の差異

育児に対しプラスイメージをもつ学生は、保育学科学生＞栄養学科学生＞看護学科学生の順であり、子ども好きの順と同じ傾向を示している。これは、保育学科学生は調査前の学習で子どもとの接触経験もあり、学科の教育目的自体が保育士や幼稚園教諭を目指しており、育児に対して良いイメージを抱いていると考えられる。

一方、看護学科学生や栄養学科学生は、保育科学生ほどには子どもの好きな人や育児にもプラスイメージが高くはない。その理由としては、看護師や栄養士を目指して学ぶ時の対象は子どもだけではなく、人間全般にわたっているためと考えられる。

これは、類似した先行研究（看護学生と他学科学生の子ども観の比較：梶山ら1994年）にも、学科の差異は学習経験、特に保育園実習や子どもとの接触経験の有無が関連していると、同じような結果が述べられている。また、松岡は大学生への調査（2000年）で、「親になる意識に肯定的な影響を与えていた要因は、良好な親子関係、幼い子どもとの接触経験、少子化問題に対する関心などであった。」と述べている。

アンビバレントなイメージを持っている学生に、よりプラスの育児イメージを持たせるような教育方法として、良好な親子関係のモデルを示したり、小さい子どもとの接触を経験させることが大切であるといえる。その他にも機会を捉えて、育児についてプラスイメージを喚起し、育児の楽しさやすばらしさを伝えていく必要性がある。

3. 大学生のもつ対児感情

本研究対象学生の対児感情は、一般大学生と比較すると（花沢1982年）、有意に接近感情が高く、回避感情・拮抗指数は低い。また石川の研究（2000年）では、対児感情の良好な群は、過去に子どもとの接触経験が多く、ふれあい体験も多いと述べている。本調査の対象学生の85%は子どもの世話をした経験があったために良い対児感情を持っていると考えられる。

回避得点が低い保育学科学生に対し、看護学科学生の場合は回避得点・拮抗指数ともに有意に高い。しかも看護学科学生には「子ども好きではない」学生が20%いることは、母

子看護を教育する上では留意すべきことである。

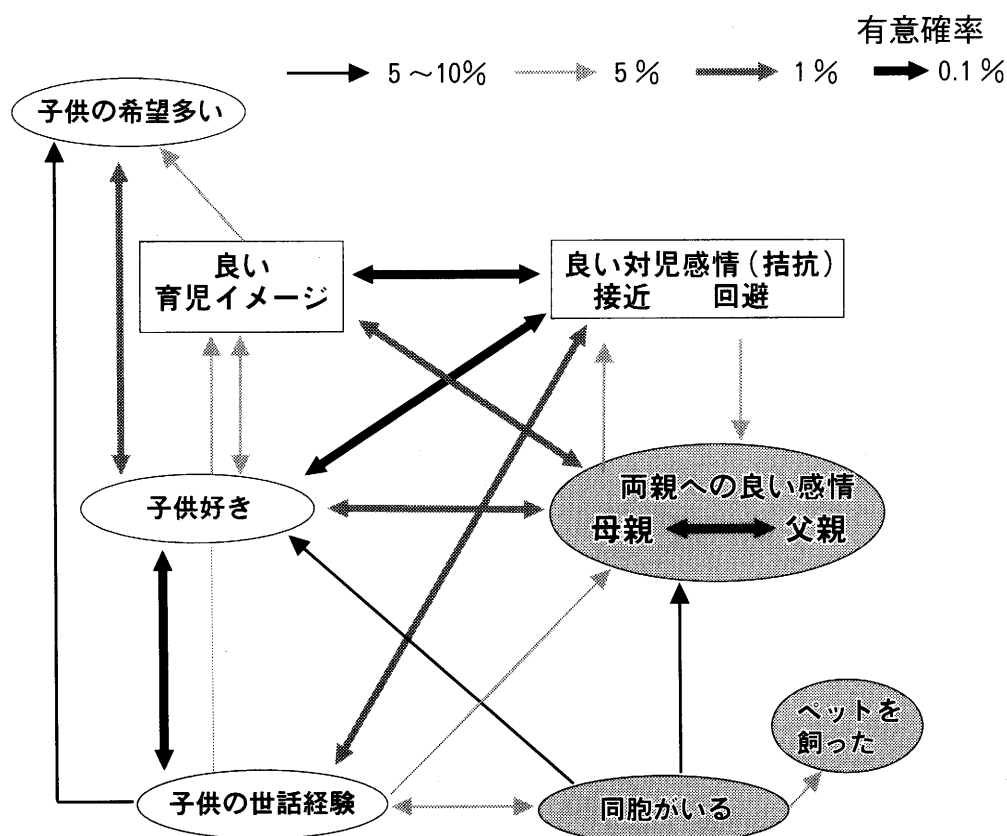
本調査結果からも「子ども好き」の学生は回避得点が低く、一方「子ども好き」で「子どもの世話経験」があり、「母親への評価」のよい学生は接近得点が高く、拮抗得点は低いことが示された。これらからも、良い母親モデルを持ち、子どもの世話を経験することが対児感情をよくする方法であると言える。

対児感情は母子の看護を行うときに、対象に近づこうとする姿勢として現れる。学内学習では、できるだけ実際に近い演習を行い、実習においても良い母親役割モデルや子どものケア経験が成功体験となるように意図的な関わりが大切であろう。

4. 育児イメージ・対児感情に関連する要因

背景と育児イメージ・対児感情の相関関係（表4）やT検定（表5）の結果から、図2のような関連図を作成した。この図は、同胞がいることや子どもの世話をした経験は子ども好きになり、両親の育児へ肯定的な評価を持ち、プラスの育児イメージ・対児感情を形成すること、さらに、親に対するよい評価や小さい子どもとの接触経験は、良い育児イメージや対児感情を形成していくと言える。このような関連性を効果的に実現できるような教育方法を産み出すことが母子看護教育に当たる者に課せられた任務であろう。

図2 背景と育児イメージ・対児感情の関連図



VI. 結論

1. 本調査対象の学生は共通して、育児についてはアンビバレントなイメージを持っている。
2. 育児イメージがよい人ほど、対児感情の接近得点は高く、回避得点と拮抗得点は低い。すなわち、育児イメージと対児感情との間には有意な相関があることがわかった。その要因には子ども好き、両親への評価が肯定的、子どもの世話の経験がある、希望する子どもの数が多いなどであった。
3. 保育学科学生は育児イメージ・対児感情とも最も高く、栄養学科学生はいずれも中間であり、看護学科学生は低かった。
4. 保育学科学生は、子ども好きが多く、子どもの世話の経験があり、父親の育児のしかたへの評価が肯定的であった。
5. 看護学科学生は、希望する子どもの数の平均は最も多く、栄養学科の学生より子ども好きや子どもの世話経験も多いが、保育学科学生に比べて、子ども好きの割合や子どもの世話の経験が少なく、親の育児に対する評価も低い。
6. 母子看護教育において、育児イメージ・対児感情を高めるためには、子どもとの接触体験やよい育児イメージを得られるような方法を工夫する必要性が示唆された。

VII. 終わりに

今回の調査により、大学生の育児イメージ・対児感情が明確となり、最近の若者の育児に対する考え方を知ることができた。特に看護科学生の結果から、母子看護学の中で体験が多くなるような教育計画の必要性が明らかになった。今後は、教育計画を立案し、実施後の変化を明らかにしたい。

引用文献

- 1) 花沢成一, 母性心理学, 70-75, 1992, 医学書院
- 2) 星直子, 学生の持つ子供についてのイメージ-3年課程学生の小児看護学履修前を分析して, 第11回日本看護学会集録(看護教育) 155-158, 1980年
- 3) 草場ヒフミ, 吉田由美, 井上英子ほか, 看護学生の子ども観—数量化類による統計的分析—第20回日本看護学会集録(看護教育) 89-92, 1989
- 4) 中淑子, 内海滉, 子どもに対するイメージ—看護学生と保育学生との比較—, 日本応用心理学会第57回発表論文集, 102, 1990年
- 5) 吉田由美, 梶山祥子, 草場ヒフミほか, 看護学生の子ども観—子どもとの関係性の見方と接触経験の程度との関連—, 日本小児看護研究学会誌, 2(1):39-47, 1993年
- 6) 梶山祥子, 吉田由美, 草場ヒフミほか, 看護学生と保育学生の子ども観の比較—子ど

もと関係性と接触経験—日本小児看護研究学会誌、3(2):103—107、1994年

7) 石川清美, アンケート調査からみた効果, 小児保健研究, 第59巻, 2号, 159—162, 2000

8) 松岡知子、堀内寛子ほか, 男女大学生の親になることに関する意識, 母性衛生第41巻
4号, 398—403, 2000